【二〇〇〇年度　駒沢史学会大会・総会報告】

本会の二〇〇〇（平成一二）年度大会・総会が左記の要領で開催された。

会　期　二〇〇〇年六月二四日（土）午前一〇時より
総　会　一三時より　於……駒澤大学　一号館三〇一教場

◆研究発表（午前の部）

摂津源氏の東国進出　根本隆一氏
芙蓉手皿にみる製品模倣
―海外輸出時代の有田磁器―　高島裕之氏
十六世紀ネーデルラントの下層民研究
―ピーテル・ブリューゲルの時代の下層民観―　岩本亜希子氏

◆研究発表（午後の部）

中世日光山と経典供養　皆川義孝氏
戦前・戦中期における郷土意識と国家　野崎義幸氏

◆特別研究報告

近世曹洞宗の展開と現世利益
―売薬・病気なおしを中心に―
本学研究員　ダンカン・ウイリアムス氏

◆記念講演

ハワイ移民たちの体験とその意義について
ハワイ大学名誉教授　ジョージ・アキタ氏

◆懇親会　ロマン（大学正門横）

本大会は、日本史関係三本、考古学関係一本、西洋史関係一本の研究発表があり、質疑応答も活発に行われた。各分野、各時代の幅広い発表者が集まり有意義な研究発表となった。お忙しい中、発表していただいた方々には深く感謝申し上げたい。今後とも会員各位の積極的な参加をお願いする次第である。

また、本年は特に廣瀬良弘教授の下で一年余に亘る研究をおえられた本学研究員ダンカン・ウイリアムス氏による特別研究報告も行われ、より有意義な会となった。ダンカン氏には、特に感謝申し上げたい。

記念講演は、ハワイ大学名誉教授ジョージ・アキタ先生にお願いした。講演内容は、ハワイにおける日本人移民の実体験とハワイ移民の近代史上における意義についてであった。アキタ先生自身の御体験もふまえた御講演は、近代史研究のおもしろさをあらためて認識させられるものであり、三〇〇名を超えた聴衆者に多くを感動させ魅了するものであった。ご多忙中貴重な御講演をいただいたアキタ先生には厚くお礼申し上げる次第である。

総会は、議長選出の後、以下のように議事が進められた。

先ず、前年度編集関係では、『駒澤史学』第五四号が一九九九年六月に、同第五五号が所理喜夫先生退職記念号として二〇〇〇年三月にそれぞれ刊行されたことが報告された。

その他の活動では、一九九九年一一月三日、泉岳寺等をはじめとする江戸史跡の見学会を開催したこと、二〇〇〇年二月二六日に卒業論文発表会が歴史学科と共催で実施され、日本史四名、東洋史一名、西洋史一名、考古学一名の発表がなされたこと、一九九九年七月三日に開催された日本歴史学協会総会、二〇〇〇年五月一三日に

開催された戦国史研究会シンポジウムを後援したこと等がそれぞれ報告された。

今年度の計画としては、編集では『駒澤史学』第五六号及び同第五七号の刊行、活動では秋の見学会及び卒業論文発表会を本年度も開催することが提案された。あわせて予算案の審議が行われそれぞれ承認を得た。

また、役員関係では、評議員に中野達哉氏が所理喜夫氏の後任として就任し、また、委員の改選が行われ承認を得た。

なお、大会当日に配布された発表要旨は次の通りである。

摂津源氏の東国進出

根本隆一

平安末期の東国を考えるうえで必要となってくるのが、国司と在地領主の主従関係である。下総国では、藤原親通・親方の父子、清和源氏の源頼綱・仲正の父子が二代にわたり国守をつとめるということがあった。そして、仲正の子、頼政は下総の在地領主である下河辺氏と主従関係を結んでいた。

この頼綱－仲正－頼政の家系は、清和源氏のうち頼光流で、頼光が満仲の摂津国多田の私領を伝領したことから「摂津源氏」と呼ばれる。武士の家系といわれる清和源氏であるが、そのうちでもこの摂津源氏は都を中心に活動し、代々歌人としても有名であった。仲正・頼政は歌人として著名であり、多くの歌を残している。したがって、摂津源氏は武士的側面、歌人的側面の両方からの研究が多く行われている。その中で、東国との関係や下河辺氏との主従関係については湯山学氏と盛本昌広氏が論じている。本報告では、この家系の官歴、摂関家との関係というものから、東国進出、在地領主との主従関係の形成を考察する。

摂津源氏は多田や美濃など、都の周辺に拠点を持ちながらも中央で活動した。中央では、とくに頼国以降は蔵人・検非違使・衛府尉という天皇や上級貴族に近侍する職を経て、受領となった。受領となったことで、その地位を介して東国と結びついてゆき、またそれによって蓄えられた財力で、より摂関家に近づくことができた。満仲は武力を期待されていたが、頼光以降はそれ以上に財力により奉仕していった。さらに婚姻もあり、摂関家の家司の地位を獲得していった。また、和歌を介した人的結合により、貴族社会のなかで生きのびていった。つまり、摂津源氏には、都における貴族的な活動と、国司の地位による地方との結びつきがあった。

頼政と下河辺氏の結びつきについて、先行研究は本人が父に従い下総国に赴いたことと、仲正の軍事行動という武士的な活動に重きを置いている。確かに、主従関係が成立した直接のきっかけはそこにあると考える。しかし、頼綱の摂関家家司・国司という貴族的な活動、さらにそれに至る頼光以降の都での活動、摂関家や院との交流という摂津源氏の積み重ねというものも決して無視できないのではないだろうか。

芙蓉手皿にみる製品模倣

―海外輸出時代の有田磁器―

高島裕之

有田磁器（肥前磁器）の海外輸出の通説は次のとおりである。

十七世紀初めに、日本ではじめて磁器が焼成された所として知られている窯業地有田（佐賀県有田町）では、十七世紀中頃から海外輸出の目的で作られる製品が登場する。当時、海外市場に今まで出回っていた中国・景徳鎮窯系瓷器が、王朝の交代（明から清へ）による窯業地の混乱、清が行なった海禁政策などの理由で大幅に減少する。中国瓷器をヨーロッパなどに運んでいたオランダ東インド会社は、中国の窯業技術導入を積極的に行ない、急成長してきた日本の有田に代わりの製品を求め、有田磁器の海外輸出が本格化する。

検討資料の中心である日本で「芙蓉手」とよばれるデザインで飾られた皿も、有田磁器の中で輸出磁器と知られ、中国景徳鎮窯系瓷器を見本とした例があることが知られている。今回、中国と有田の芙蓉手皿各々の内面文様から模倣関係を検討し、海外輸出時代初期の有田磁器の様相、特に生産の様相について窯跡出土資料などを用いて、迫ってみることにした。海外輸出時代の有田磁器や、生産地の生産体制については多くの先論があり、参考とするところが多い。自らの視点で両者の模倣関係をみると、すなわち、両者の内面文様を構成する組合わせの法則が見られるようであり、中国瓷器を意識して有田磁器が模倣した様子を窺うことができた。また、模倣を行なう際の技術導入のしかたについては、製品の性格（量・質）に作用すると改めて確認することができた。しかし今後、厳密な意味で中国の製品とどのように関わっているのか明らかにするという点で、課題は多い。

【主要参考文献】

1. C. L. van der Pijil-Ketel editor. *THE CERAMIC LORD OF THE WITTE LEEUW*, RIJKS MUSEUM, Amusterdam 1982
2. 大橋康二・尾崎葉子『有田町史　古窯編』有田町史編纂委員会。一九八八
3. 萩原博文他『平戸和蘭商館跡の発掘Ⅲ　鄭成功居宅跡の発掘』平戸市文化協会。一九九二。
3. 大橋康二「海外輸出された肥前磁器の特質について―芙蓉手皿を中心にして―」（『王朝の考古学』雄山閣。一九九五）
4. 西田宏子・出川哲朗『中国の陶磁10　明末清初の民窯』平凡社。一九九七
5. 野上建紀「肥前における磁器産業について―生産施設及び環境を中心に―」（『研究紀要第5号』有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館。一九九七）
6. 村上伸之・野上建紀『有田の古窯』有田町教育委員会。一九九八
7. 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会。二〇〇〇

十六世紀ネーデルラントの下層民研究

―ピーテル・ブリューゲルの時代の下層民観―

岩本　亜希子

美術研究家マックス・フリートレンダーはブリューゲルについてこう述べている。「日常の人間生活を先入観のない誠実さと、ユーモアで嘲弄したり歪曲することなしに、特定の傾向もなく観察した。」十六世紀ネーデルラントに登場したピーテル・ブリューゲルは、今までにない視点から農民、都市下層民を描くことにより、ネーデルラントの日常生活・習慣・文化を絵の中に盛りこんだ。

では、なぜ十六世紀、そしてネーデルラントでブリューゲルは、農民、都市下層民のありのままの人間生活を描くという、特徴ある絵画を描くに至ったのだろうか。

十三―十四世紀のネーデルラント絵画において下層民が登場することは珍しくなかった。しかし、下層民はあくまでも脇役で、とくにキリストの生涯における下層民への慈善と、これに倣った聖人たちの行いを描いた絵画に登場することが殆どであった。常に脇役として描かれていた下層民が主役になるにはブリューゲルの一時代前を生きた十五世紀のヒエロニムス・ボスを待たなければならない。しかし、ボスはありのままの下層民の姿ではなく、悪行を働く下層民像という独自の解釈で下層民を描いた。同じネーデルラントで活躍した二人であるが、二人の絵画に表された下層民像は大きく違っている。ボスの時代は十五世紀。ブリューゲルの十六世紀とはどんな時代であったのだろうか。

十六世紀、ネーデルラントを支配していたスペイン・ハプスブルク家はフェリペ2世に継承されスペイン流の異端審問所と絶対主義が持ち込まれようとするとネーデルラント貴族たちは抵抗を強めた。また、経済面ではアントウェルペンを中心に中継貿易によってヨーロッパ随一の繁栄を謳歌していた。ヨーロッパ中の商人たちがアントウェルペンに集まることにより、ネーデルラントは国際化し、あらゆる宗教、思想、文化に寛容な風土が出来上がっていた。ブリューゲルはこのようなスペインによる締め付けと、経済的自立、文化的自立が相対する時代に活躍した画家であった。

本報告では、十六世紀ネーデルラントの時代背景が当時の市民の意識に与えた影響を、ピーテル・ブリューゲルを市民代表として、彼の描いた下層民像の中に見ていきたい。

中世日光山と経典供養

皆川　義孝

経典供養とは、法式通り経典を書写することや、その経典を安置・埋納する供養で「如法経」ともいわれる。この如法経は、天長一〇年（八三三）比叡山横川で円仁が「法華経」を書写し、小塔に安置したことで創始される。そして、末法思想の流布にともない、長元四年（一〇三一）覚超が弥勒の世まで、円仁の写経した法華経を伝えようとして、「経筒」に入れて埋納する。この経典を書写し、経筒に入れて埋納する如法経の法式は、一一世紀後半に末法思想に基づき、仏教的作善の一種として確立された。また、如法経は日本独自の信仰ともいわれている。

この如法経の埋納行為は、はじめ、藤原道長などの洛中貴族に受け入れられ、平安期には経塚に経筒を埋める「埋経の経塚」が営まれる。鎌倉末期になると追善供養の性格が加味され、廻国の六十六部聖により、各地の霊山に埋納、奉納する「納経の経塚」が登場する。そして、室町期に発生し、近世になると庶民が盛んに行う、一石に経字を書写し経塚に埋納する「一石経の経塚」へと展開する。つまり、各地に発生した経塚の歴史は庶民信仰の展開を考える上でも重要な分野といえよう。

今回事例として取り上げる日光山は、九世紀以降に登場する法華経を奉じ、諸国を巡業する「持経者」の活動があげられる（「大日本国法華経験記」）。平安期以降、男体山禅定（登拝行）によって山頂に経塚が営まれる。そして、鎌倉末期には六十六部聖の活動がみられ、室町期に書写された六十六部聖の縁起（「六十六部聖縁起」）が伝来する。また、近世に庶民が専ら行う一石経の経塚が、室町期に造営されている。つまり、日光山は東国における経塚の展開を考える上で、さまざまな情報を与えてくれる。

中世日光山の研究は、文献史学において中心的な御堂である常行堂の古文書類を中心に検討する形で、別当の法灯史を中心とした通史、室町期の支配機構の解明と農民闘争、そして、戦国期、下野壬生氏との係わりといった俗的側面が主に論じられてきた。一方、民俗学の分野では信仰の基盤となる日光修験や「日光三所権現」の展開が取り上げられてきたといえよう。

中世の日光山には真言系の霊場で六十六部聖の納経先であった「滝尾」や、観音信仰の霊場の「中禅寺」、釘念仏信仰の「寂光寺」など様々な信仰を持ち供えた御堂が存在していた。そして、これらの諸堂を通して、各地のさまざまな階層の人びとの信仰対象となっていくのであり、日光山の存在意義を考える上で重要な部分といえる。しかし、これらの諸堂について、取り上げた研究は存外に少ない。つまり、これらの諸堂を通して、中世日光山の存在を再検討していくことが研究史上の課題点である。

報告では、日光山の経塚を取り上げる。具体的には、経塚が形成された場所について概観し、特に、滝尾の経塚に着目したい。

戦前・戦中期における郷土意識と国家

野崎義幸

最近、山之内靖・ヴィクターコシュマン、成田龍一氏は「ファシズム」を戦時体制一般に解消しようとし、戦前と戦後を直結させる議論を提唱した。その後、「ファシズム」体制論者から政治的な反論が加えられている。しかし、階層間関係、消費生活、イデオロギー等、多種多様な社会レベルにまで問題関心が及んでいる現在においては、それほどの説得力を持ち得ないでいる。このような研究状況は、最近になって森武麿氏、大門正克氏らによって「ファシズム」という概念そのものを見直す動きを醸成した。両氏は「戦時」と「戦後」を統一的に把握するため、戦時期、戦後改革期を中心として高度成長期に至る展望を地域の実態にそくして、具体的に実証するべきであるとしている。この試みは、大門氏による「主体をどのようにとらえたらいいのか、受動的ではない形で主体をとらえるにはどうしたらいいのか。」といった最近の問題関心からなされてい

ると理解し得る。

民衆を扱う際のポピュラーな論点は、国家の施策に対する国民の「合意」形成の在り方を追求するというところにある。ここには、常に受身の民衆像がある。そこで、高岡裕之氏は民衆の「主体性」を指摘し分析を試みているが、氏が強調するところの「主体性」とは、国家の施策を「自発的に内面化」するという意味のものなのであり、従来からの研究状況を乗り越えてはいない。

このような閉塞的状況を乗り越えるひとつの方法として考えられるのは、大門氏が強調する「つながりの中で矛盾する存在」として主体を捉えるべきであるということである。私はこの「つながり」を地域にすむひとびとの人的結合と考えたい。そして、こうした人的結合のなかからは、「地域意識」「郷土意識」が生まれるが、これらは、彼らのもつ「国民意識」と比較しても、少なくとも同レベルで語られるべき意識に疑いようはない。その意味で、殊に「地域意識」や「郷土意識」を分析しそれが如何に「国民意識」とリンクしていくのかを追求することによって、現在までの「受身」の民衆を乗り越え、「主体的」な民衆像を提供できるのではないだろうか。

以上のような視点のもと戦前・戦中期を扱った論稿は非常に少ない。しかし、「受身」としての民衆像を鑑みたとき、その方法論の有効性は否定できないであろう。本報告では山形県を事例とし、意識諸形態について考える。このことによって、「強制的同質化」の在り方を問い直すこととなり、ひいては「ファシズム」体制論全般に一石を投じたい。

以上の問題関心のもと報告を行なうものである。

近世曹洞宗の展開と現世利益

―売薬・病気直しを中心に―

ダンカン・ウイリアムス

初めに曹洞宗が近世においてどのように発展したかをさぐる一つの手段として、病気直しに焦点を当てて考察してみる。

仏教における病気直しには二つの要素があって、一つが“medical therapeutics”（薬による病気直し）、一つが“faith-based therapeutics”（信仰による病気直し）である。近世曹洞宗ではその二つの要素をどのように用いて宗派の展開を計っていったのであろうか？以下の実例をもとに、歴史的かつ宗教学的なアプローチを試み、曹洞宗が現世利益をどのように取り込み教団の発展をしていったかを検証していく。

＊薬による病気直し：道正庵の解毒円―万病薬としての薬

＊信仰による病気直し：高岩寺（とげぬき地蔵）信仰

―難病・業病の癒し